

老人福祉施設のユニバーサルデザイン便所に関する研究

研究目的

超高齢社会といわれるなか、施設はユニット化・個室化の段階ですが、入所者の生活の質の向上が求められています。

現在の介護施設における便所での排泄支援の課題に対して、介護負担を軽減するための建築計画や設備機器を検討し、介護職員の動作を効率化した上で、入所者の自立度を高めることにより生活の質を改善し、安心した生活を実現すること目的とします。そのために施設内での様々な入所者に対応するユニバーサルデザインの考えにより介護施設での便所の配置計画やブースデザインの設計手法の構築を目指します。



写真1 現状のトイレブース

研究概要

介護職員の動線や介護時間などを調査し、介助負担の割合やバランスを改善するために、介助動作の課題を明らかにします。職員同士の連携や情報の伝達、介助の協力など全体像を把握します。今年度の調査から、二人の職員で移乗介護を行うことで身体負担を軽減していますが、おむつに頼らない介護方針の中で職員の連携に工夫が必要な状況でした。

居室から便所までの経路における移動介助や便所内での介助について、入所者の動作と介護職員の動作を解析し、動作のしやすさや身体負担の状況、見守りやすさなどの現状の課題と改善について検討します。排泄介助を行った後は、衛生面に配慮した行動が動線に影響していました。

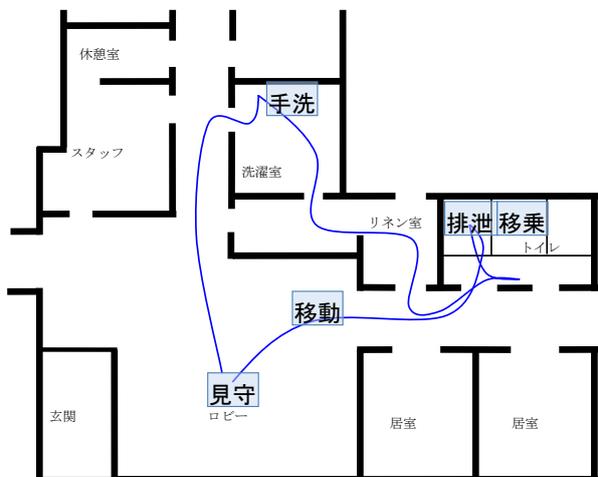


図2 排泄介助に関する作業

研究の成果

介護サービスの実態調査で、職員の介護職員の作業内容に占める排泄介助の割合は高く、トイレまでの移動介助と移乗介助も合わせて行われる実態を把握しました。職員と入所者の身体的負担を軽減する方法として二人介助が行われていますが、効果を評価できていない現状でした。

今後は、介護職員の動作を分析し効率化できる計画と入所者の負担が軽減されるために必要な空間構成について検討を加える予定です。